

自己家畜化と学校教育

—自己家畜化論に見る

「自発的隷従」と「自由からの逃走」—

辻 和希

1. はじめに

20世紀初頭、ドイツの人類学者たちの中で「自己家畜化 (Selbstdomestikation)」という概念が生まれた。「自己家畜化」というとき、「自己」とは、一個人のことではなく、人類全体のことを指す。つまり、「自己家畜化」とは、人類が人類を家畜化してきたという考えである。

そもそも「家畜」とは、人類がその生活に利用するために、野生動物を改良して生み出した動物のことである。本来、家畜を生み出す側の人類が家畜であるとする考え方は、一見すると、荒唐無稽にも思われる。しかし、「馬車馬の如く」働く人間がいることを思い出してみると、人類が家畜であることを簡単には一蹴できない。

かつて、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は、「人間とは教育されなければならない唯一の被造物である」¹という言葉を残した。彼は、「教育 (Erziehung)」が「養育 (Verpflegung)」と「訓育 (Disziplin)」、「知育 (Unterweisung)」から成ると考えていた。カントによれば、子供を躾ける訓育では、動物性が人間性に転換されるという。言い換えれば、訓育とは「野性的な粗暴さを取り除く行為」である²。野性的な粗暴さとは、「人間の規則に拘束されないことである」³。それゆえ、野性的な粗暴さを取り除かれた状態、人間性を獲得した状態とは、人間が作り出した規則に拘束された状態といえよう。つまり、教育には、野生的な粗暴さを取り除くことで動物の一種であるヒトを人間にする過程が含まれているのである。

カントの考えに沿えば、委細は違えども訓育と家畜化は根本的な目的の部分で共通している。なぜなら、後述するように家畜化とは野生動物の粗暴さを取り除き、従順にする過程だからである。言い換えれば、教育は人間の家畜化をその一部に組み込んでいるのである。あるいは、学校教育が人間の自己家畜化を制度として支えているということもできる。

歴史の順序としては、まず教育が先にあり、教育を家畜化に転用したと考える方が適切かもしれない。教育から生まれた家畜化が、教育と類似するのは必然である。そのため、改めて教育を家畜化という視点から分析することは無意味ではないかという声も上がるだろう。しかし、それでもやはり、家畜化という視点からしか見えてこない教育の姿がある。教育から派生し、独自に発達を遂げた家畜化という手法は、おそらく、教育に逆輸入される形で人間の自己家畜化を後押ししてきた。そして、逆輸入された家畜化は、いまやその姿を「教育」という美辞麗句の裏にその姿を隠してしまった。それゆえ、家畜化という視点から改めて教育を分析することで、見えなくなったその姿を浮き彫りにすることができるのである。

本稿では、「人間は自己家畜化する唯一の被造物である」こと、そして、自己家畜化が学校教育によって制度化されていることを明らかにする。そのためにはまず、「自己家畜化」がどのような概念なのかを確認しておこう。

2. 「自己家畜化」とは何か

「自己家畜化」という概念は、20世紀初頭、ドイツの人類学者たちの中で生まれた。人類学者である江原昭善によれば、その嚆矢は、1896年に発表された Eduard Hahn (1856-1928) の著作⁴にまで遡ることができる。ただし、概念として精緻化されたのは、1914年に発表された Eugen Fischer (1874-1967) の論文⁵においてだったという⁶。

そもそも、「自己家畜化」は、人間の身体的特徴がいかに形成されてきたかを説明する概念として使われてきた。野生動物を家畜化するために、ある形質

を強めようと選択的交配を繰り返すと、家畜に共通の身体的特徴が現れることが知られている。簡単な例を挙げると、家畜化された動物は体毛が一部減少する。これはイノシシとブタを思い出すとわかりやすい。ヒトの場合も、他の霊長類と比較すると圧倒的に体毛が薄い。この一因を家畜化に見出したことから「自己家畜化」という概念が生まれたのである。他にも家畜化によるものと推測されているヒトの形質がある。女子栄養大学名誉教授である小原秀雄は、人間が自己家畜化のなかで獲得した形質として、不定期・過剰な性行動、頻繁な食物摂取と肥満化、体毛の減少・一部長毛化・乳房の肥大、従順化という例を挙げている⁷。

このように、「自己家畜化」という概念は、選択的交配によっていまの人間の身体的特徴が生まれてきたという、ある種の生物学的な文脈の中で語られてきた概念であった。こうしたなかで、江原によれば、Egon Freiherr von Eickstedt (1892-1965) が、人為的環境の中で人間が自らを家畜化する過程を「自己家畜化」と名付けたという⁸。日本では、1971年に江原昭善が「自己家畜化論」を紹介したことを皮切りに、国内で、人類の自己家畜化が論じられるようになる。1980年代から2000年初頭にかけて、「自己家畜化」に関する論文や著作が継続して発表された。

3. 家畜化による従順化 オオカミからイヌへの家畜化を例に

家畜化された動物に見られる特徴の1つに従順化がある。家畜化に伴って従順化してきた動物の例としては、イヌやブタをあげることができる。イヌは元を辿れば、その祖先はオオカミである。オオカミは厳格な上下関係を持つ集団で狩りをすることで知られている。イヌが人間の指示を聞くのは、オオカミの持つこうした形質を家畜化の中で人間に都合がいいように残してきたからである。人間は、群れにおける序列関係が強固な動物を家畜化の対象にし、群れのリーダーの枠に人間自身が収まる形で家畜動物たちを管理してきた⁹。

M. Germonpréらによると、オオカミからイヌへの家畜化は、3万1700年

前の後期旧石器時代まで遡れる¹⁰。彼らがそのように主張する根拠は、ベルギーのゴイエット洞窟で発見されたイヌのものと思われる頭蓋骨である。この頭蓋骨は、現代のオオカミとは異なっており、先史時代のイヌに近いという。しかし、この骨が家畜化以前のものかに関してはまだ結論が出ていないようである¹¹。人間とイヌの生活がいつ始まったのかという問いへの答えはまだ出ていない。しかし、人間とイヌの生活がどのように始まったかという問いに対しては、ある程度の共通解ができあがっている。

オオカミからイヌへの家畜化の始まりは、オオカミが人間の狩猟グループが出す残飯をめあてに、人間を追いかけ始めたところにある¹²。元来、人間とオオカミは互いに敵対する関係性であった。それゆえ、そばにオオカミがいれば人間は彼らを攻撃し、突き放していたことが推測できる。そうでなければ、残飯ではなく人間がオオカミの餌食になっていたであろう。人間から攻撃される状況にあってもなお、人間のそばに近寄れたオオカミは、それ以外のオオカミよりも多くの残飯を得て、多くの子孫を残すことに成功したと R. C. Francis は推測する¹³。こうした付かず離れずの人間とオオカミの関係性の中で、攻撃性が低い個体を選別する自然淘汰が行われた。人間に対して攻撃性が少ない遺伝子が残り、それがイヌの従順さに繋がることになった。

オオカミからイヌへの家畜化の過程で、従順さが獲得されてきたことを目撃した人間は誰もいない。それゆえ、この説明は単なる仮説に過ぎないと反論もできる。ロシアの科学者ベリヤーエフ (Dmitry Konstantinovich Belyayev, 1917-85) が率いる研究チームはこうした反論への反駁を試みる実験をおこなった。

1950年代、ベリヤーエフはイヌ科のギンギツネを対象に家畜化の過程を再現する実験をおこなった¹⁴。毛皮の採取のために養殖場で養殖されていたギンギツネの中から人間に攻撃性をあまり示さない個体を選択し、交配を繰り返した。ベリヤーエフの共同研究者であるトルート (Lyudmila N. Trut, 1933-) によれば、交配によって生まれた第6世代の仔ギツネは、人間との接触機会を

しきりに求めるようになり、人間の注意を惹くためにクンクン鳴く個体さえ出てきたという¹⁵。このような個体は「家畜化されたエリート (domesticated elite)」と呼ばれ、第 20 世代になると全体の 35% を「エリート」が占めるようになり、1999 年時点では、70～80% を占めるようになったという¹⁶。このベリヤーエフとトルートらの実験から、オオカミからイヌへの家畜化の過程に関する推測が、一定の妥当性を持っていることがわかる。

また、この実験からは、家畜化が動物の身体的特徴にも影響を与えることが明らかになった。ベリヤーエフとトルートは、人間に攻撃性がない、つまり、従順さという基準だけでギンギツネを選択的に交配してきた。毛色や尻尾の形などは考慮に入れていない。しかし、多くのエリートのギンギツネには、垂れ耳や短い尾、被毛が斑模様になるという身体的特徴が現れた¹⁷。さらには、発情期にも変化が見られた。通常、ギンギツネは年に 1 回しか発情しないが、一部のエリートギンギツネのメスは、年に 2 回の発情期を持つようになった¹⁸。

ギンギツネの場合、「従順さ」という気質に焦点を絞った家畜化によって、身体的変化、生理的变化が生じた。この事例から、他の家畜動物の身体的変化・生理的变化も同じように獲得されたのではないかと推測ができる。

4. 「家畜化」による「知覚世界」の変化

ドイツの動物学者ヘメル (Helmut Hemmer, 1940-) は、家畜化の中で重要な役割を演じているのは、「知覚世界 (Merkwelt)」であるという。

知覚世界は、もともとドイツの生物学者であるユクスキュル (Jakob Johann Baron von Uexküll, 1864-1944) が造り出した概念である。生物は各々の感覚器官に応じて世界を知覚し、その知覚世界を構築している。そして、その知覚世界に対して主体が作用し、「作用世界 (Wirkwelt)」を構築する。作用によって、知覚世界に変化が生じ、新たに構築された知覚世界に対して、新たな作用が生まれる。この知覚と作用の往還のことをユクスキュルは「機能環 (Funktionskreis)」と呼ぶ。こうした知覚世界と作用世界によって構築される

世界が「環世界（Unwelt）」である¹⁹。生物はそれぞれの環世界の中で生きている。ユクスキュルはその一例としてマダニの環世界を紹介している。

夏の森に足を踏み入れてみよう。私たち人間は万緑の中にいることを感じるが、マダニはそうではない。マダニは目が見えない。マダニが知覚できるのは温度感覚と触覚、哺乳類の発する酪酸の匂いの3つだけである。マダニの環世界はこの3つだけから構築されている。人間とマダニは、それぞれの環世界が部分的に重なり合うことはあるが、まったく同じ世界を共有しているわけではない。それゆえ、ユクスキュルからすれば、動物にとって、「客観的環境」なるものは存在しないのである²⁰。

先述したギンギツネの例を思い出してみよう。バリエーエフとトルートらがギンギツネを養殖工場から連れてきた時、そのギンギツネは人間に対して攻撃的な反応を示していた。つまり、この第1世代のギンギツネにとって人間は外敵として知覚されていた。しかし、数世代を経た後に生まれたエリートギンギツネは人間に懐いていた。つまり、エリートギンギツネの知覚世界では、人間は外敵ではなくなったということである。ヘメルを考えに従えば、家畜化とは、ある動物種に対して知覚世界の変容を人為的にもたらすことによって、動物の作用世界および環世界をも変える行為であるといえよう。

5. メタファーとしての「自己家畜化論」

ここまでの、動物の家畜化がどのようになされ、その結果としてどのような特徴を家畜動物が持つに至ったかを確認してきた。では、人間もオオカミやギンギツネの例のように家畜化されてきたのだろうか。家畜化される前の人間を「ヒト」とするなら、ヒトから人間になるにあたって選択的交配が行われてきたのだろうか。これに関しては、判断を下すための情報が未だに不十分である。それゆえ、現生人類の身体的・生理的特徴が自己家畜化の結果であるとは結論づけることはできない。

分子人類学者の尾本恵市は、生物学的な文脈から離れ、「自己家畜化」とい

う概念を人間のあり方を説明するメタファーの一種として捉え直している²¹。本稿でも、こうした尾本の考えを踏襲し、「家畜化」および「自己家畜化」を教育という営みを分析するメタファーとして扱っていく。

家畜化が、人間社会に役立つように野生動物を改良することだとしたら、ヒトを家畜化するのもまた人間である。ヒトがそれ以外の生物によって人間社会に役立つように改良されるとは考えられない。神によってヒトの家畜化がなされていると考える人もいるかもしれない。神からすれば人々は「迷える子羊」である。プロテスタント系の教会に行けば、迷える子羊である人間を導く「牧師」がいる。しかし、牧師もまた人間である。仮に神が存在しても、人間を介してでしかヒトを家畜化することはできない。それゆえ、やはり、ヒトは人間によって家畜化されるのである。とはいえ、野生動物の家畜化と人間の自己家畜化が、まったく同じものであるとも言い難い。

本来、家畜化は、ある世代に見られた形質を次の世代で強めるために、選択的交配を行うことで進める。それゆえ、家畜化とは、同じ世代間で変化や差異が生じるものではない。自己家畜化も、生物学の文脈では、家畜化によって、世代を経るにつれ、人類は現生人類の身体的特徴を獲得するに至ったという意味で使われていた概念であった。しかし、人間の自己家畜化を理解するためには、世代を超えて進行する家畜化のみならず、同世代間で進行する家畜化も視野に入れる必要がある。同世代間での家畜化がどのようなものかは後述する。本稿では、同世代間で進行する家畜化も含む広義の自己家畜化を、人類学における自己家畜化と区別するために〈自己家畜化〉と表記する。

野生動物の家畜化においては、1つの要件として「従順さ」という形質があった。これは、人類が自己家畜化していくにあたって、重要なものといえよう。しかし、私たちは、通常、何かに従うことには息苦しさを感ずるはずである。理性的に考えてみれば、何かに従うよりも、何にも縛られない自由を人間は求めるだろう。にもかかわらず、私たちは「従順さ」を獲得しているのである。しかも、自発的に従順になっている。文字通り、〈自己家畜化〉とも呼べるこ

の事態は、いかにして起きているのだろうか。

6. 自発的隷従

オオカミからイヌへの家畜化、ベリヤーエフらがおこなったギンギツネの家畜化、いずれの場合も家畜化された個体は、その性質として「従順さ」を備えていた。人間がある動物を管理する上では、その動物が従順さを備えている方が都合がいい。それゆえ、家畜化では、「従順さ」という性質が選択的交配の中で強化される。つまり、家畜化とは動物を従順にする過程とも言える。だとすれば、〈自己家畜化〉とは、人間の、人間による「自己従順化」の過程と見ることが出来る。しかし、自らの自由を制限するような従順さを自ら身に付けようとするとは、いかなる事態であろうか。

16世紀フランスで活躍したモラリストの一人であるラ・ボエシ (Étienne de La Boétie, 1530-63) は、人間が圧政や圧政者に対して自ら従順になることを「自発的隷従 (la servitude volontaire)」と呼び、人間の本性に反する状態と痛烈に批判した。

ラ・ボエシは、自然状態において人間は自由であり、自由を守るための情熱を持っていると主張する²²。つまり、人間はその本性として、自由であり、隷従という束縛された状態を嫌うというのである。こうした本性に反する「自発的隷従」という事態は、なぜ起こるのであろうか。ラ・ボエシは、「自発的隷従」を可能ならしめているのは生まれもった性質の力を遥かに凌駕する「習慣」の力だと、次のように指摘している。

自然は、我々に対して、習慣ほどの力をもたないと白状しなければならない。なぜなら、自然は、それがいかによきものであったとしても、それを保ち続けようとするならば、失われてしまうからである。その一方で、習慣は、自分の流儀で、我々の本性に反して、我々を陶冶するのである²³。

いかに自然が人間に自由や自由を希求する性質を与えようと、習慣によってその性質は歪められてしまう。さながら、はじめは人間を威嚇していたギンギツネが選択的交配の結果その本性を歪められ、従順になるかのようである。ギンギツネが従順さを得るには、世代を超えた変化を待たなければならなかった。一方で、人間の場合は次の世代を待つことなく従順さを獲得できる。こうした変化は、習慣によって人間の「知覚世界」が変容した結果ともみてとれる。

習慣によって人間が獲得した従順さは、従順さを獲得した当人の性質である。この従順さは、後天的に獲得された性質であり、遺伝によって伝わるものではない。それでは、この性質が世代を超えて継承されるのはなぜであろうか。ラ・ボエシは次のように答える。

実を言えば、まず、力による強制や、自分の意に反する形で我々は隷従する。だが、次に、人々は隷従することに慣れる。そして、自由とは何かを頭でも理解せず、身体でも知らない後続世代の人々は、彼らの先祖が意に反してやってきたことを自発的にやり、そうすることに悔いも感じない。そういうわけで、抑圧される状況下に生まれ、かつてはどうだったのかを顧みることもしらずに、隷従状態のもとで発育し、成長する人々は、生まれたままの状態です満足する。さらに、この人々は、その人生の始まりで自分が見つけた善や権利以外を所有しようなどとは一切考えず、生まれた状態を自分にとって自然なものとするのである²⁴。

従順さを獲得した世代の後続世代は、従順な状態を当然視する。つまり、後続世代にとって従順さは、彼らが所属する社会のエートスなのである。つまり、従順さは、その社会集団の習俗であり、道徳になるのである。

かつてこの世に存在した君主制の国を思い出してみると、往々にして、隷従を強いられる側が支配者を数において凌駕していた。それゆえ、隷従を強いられた人々が革命に向けて蜂起すれば、体制の転換を成し遂げることもできる。

しかし、こうした革命は頻繁に起こるわけではない。人々は隷従することを甘んじて受け入れ、支配者は玉座に留まるのである。それでは、こうした事態が起きるのはなぜであろうか。武力によって隷従することを強いられていると想像するのは容易い。しかし、ラ・ボエシは、隷従の原因を武力ではなく、別のところに見ていた。

　　圧政者を守るのは、騎馬隊や歩兵団ではない。要するに、武力で守られているわけではない。圧政者をその地位に留め置き、国全体を圧政者に無理矢理従わせているのは、ほんの四、五人の人間である。このことは、にわかには信じ難いかもしれないが、正真正銘の事実である²⁵。

この引用箇所、ラ・ボエシが「四、五人の人間」として想定しているのは、圧政者の側近である。圧政者の側近たちは、圧政者がその地位にいる限り、自分たちも甘い汁を吸うことができる。さらに、側近たちには、そのおこぼれにあずか与ろうとする狡猾な人々が集まってくる。こうして側近たちと狡猾な人々の間に、圧政者と側近たちの間にあるような関係性が生まれる。そして、狡猾な人々の下にも、そのおこぼれに預かろうとする人々が集まる。こうした人々のつながりを利用し、圧政者は国民を隷従させ、自らをその地位に留めているとラ・ボエシは考えていた。

7. 近代以降における、自由の放棄

人々が自由を捨て、自発的隷従状態に陥る原因を、ラ・ボエシは圧政者の側近に見ていた。側近は、既得権益を守るために圧政者に従う。側近の周りに集まった人々も同様である。人々が自分の利益のために自由を対価として支払う、というラ・ボエシが描いた構図は、理解しやすいものではある。君主制の世ならラ・ボエシの素描でも十分な説明ができたかもしれない。しかし、現代における自発的隷従状態は、一層複雑な心理状態であろう。

現代社会において、自発的隷従がどのようにして生まれているのかを、心理学者フロム（Erich Fromm,1900-1980）の思想を手がかりに探っていこう。フロムは、主著『自由からの逃走（Escape from Freedom,1941）』の中で、近代化が成された社会で、人々が自由から逃走するようになった経緯を詳細に分析している。この著作は、ナチスのファシズムが世界を席卷する最中に刊行された。こうした時代背景をふまえれば、この本の眼目が、人々がなぜ自由を放棄し、全体主義に与するようになったのかを明らかにするところに置かれていたことは明白であろう。

フロムは、自由から逃走するように人間を駆り立てる要因として、第一次的な絆を断ち切られたことに由来する無力感や孤独感を挙げている²⁶。第一次的な絆とは、「子どもを母親に結びつけている絆、未開社会の成員をその氏族や自然に結びつけている絆、あるいは、中世の人間を教会やその社会的階級に結びつけている絆」のことであり、個人に「安定感と方向づけ」を与えている繋がりのことである²⁷。

近代化以前の西洋社会においては、身分制度や地縁によって人々が結びつけられていた。いわゆる、ゲマインシャフトの社会集団が形成されていた。しかし、近代化以降は、資本主義社会の発展に後押しされた個人の自由が、こうした第一次的な絆をほとんど断ち切ることになる²⁸。その結果、自らの無力と孤独に苛まれることになった人間は、その自由を捨て、「権威主義（Authoritarianism）」や「破壊性（Destructiveness）」、「機械的画一性（Automaton Conformity）」にすぎようになる。権威に擦り寄ることで、ある人は自分に足りないものを補うことができる。自分と比較対象になるものをすべて破壊し、除去することで、ある人は無力感からの逃避を図る。鋳型に押し込められたかのように、他の人々と同様のパーソナリティを獲得することで、ある人は孤独感を薄めることができる。

フロムは『愛するということ（*The Art of Loving*, 1956）』の中でも、同様のことを述べている。元来、人間は孤立感をいかに克服するかに頭を悩ませ

てきた。フロム曰く、この悩みはあらゆる時代・あらゆる場所で見られるものの、特に、第一次的な絆を断ち切られた人間にとっては切実なものになるという。この悩みを一時的に解決する際に、人々は「祝祭的興奮状態 (orgiastic states)」、「集団への同調 (conformity with the group)」、「生産的活動 (creative activity)」といった3つの方法を安易に選ぶ傾向がある²⁹。

人類の歴史を振り返ってみると、人間は、フロムが消極的自由と呼ぶところの「……からの自由」を獲得するために、闘争を繰り返してきた。近代以降、消極的自由を人々は獲得した。このようなヘーゲル史観的歴史の終局において、人々が自由のための闘争から、自由からの逃走へとその態度を変えるという逆転現象が起きたのである。コジェーヴ (Alexandre Kojève, 1902-68) は、ヘーゲルが考えた歴史のあとに、アメリカ的な消費社会の中で、与えられた環境を与えられたままに享受するだけの、人間の「動物化」が起きると考えていた。こうしたコジェーヴの指摘は現代社会に生きる私たちには現実味を持って感じられる。しかし、実際はコジェーヴの指摘する「動物化」のみならず、＜自己家畜化＞による「家畜動物化」の進行も起きているといえよう。

8. ＜自己家畜化＞の段階 近代以前

ラ・ボエシやフロムの洞察を基に＜自己家畜化＞を捉え直してみると、人間の＜自己家畜化＞は二段階に分けて進行してきたことになる。ただし、中世と近代以降でそれぞれの段階の様相は異なる。

中世までの第一段階は、力による強制によって従順さを強いられる段階である。この段階で従順さを獲得できない人間は、その共同体から排除されるか、最悪の場合、命を奪われてしまう。いわば、選択的交配ではなく、選択的淘汰が行われる。選択的淘汰によって、従順さを備えた個体だけが共同体に残る。本来は自由を希求する人間だが、選択的淘汰への恐怖心や既得権益への固執といった習慣によって、その本性が歪んでしまう。すでに確保された安全への固執と見れば、選択的淘汰への恐怖心すら既得権益への固執に還元できるだろう。

いずれにせよ、習慣によって本性を歪められた人々は、おのずから従順さを獲得していく。この第一段階の〈自己家畜化〉は、同世代間で進行していくものである。

第二段階では、新しく生まれた世代の従順化が習慣や教育によって行われる。第一段階で、共同体には従順さを備えた個体だけが残された。ギンギツネの場合は、従順な個体同士で交配を繰り返していくことで、後続世代では従順な個体の割合が増えた。だが、人間もギンギツネと同じように、遺伝によって、従順な個体が増加するかは定かではない。

性格に関しては、遺伝と環境、双方の影響を受けていると考えられている。遺伝子の影響がどれほどかは定かではない。しかし、環境の影響を受けるのだとすれば、「従順さ」の獲得に関して、ラ・ボエシが説明していることは、ある程度妥当な主張だといえよう。この共同体では「従順さ」を備えていることが自明となっている。新しく生まれた世代がそのような共同体の中で育てば、自分たちが従順さを備えることを疑わない。むしろ、従順であることが望ましいこととさえ思うだろう。

とはいえ、従順さが自明となった共同体の中にあっても、人間がその本性から自由を求める可能性はある。しかし、人間の本性は、従順さが当たり前になった共同体の習慣によって、いとも簡単に改変させられてしまう。このように、第二段階では、従順さが自明になった集団の中に新世代が生まれ、従順であることに疑問を抱かない新世代が、その価値観を身につけることによって〈自己家畜化〉が進行する。第二段階の〈自己家畜化〉は世代を超えて行われるのである。

9. 〈自己家畜化〉の段階 近代以降

フロムの主張した「自由からの逃走」は、現代人が従順さを獲得していく、〈自己家畜化〉のプロセスと読み替えることができる。以下では、フロムの思想に依拠しながら、近代以降、いかにして人類の〈自己家畜化〉が進行してき

たかを考えてみよう。

近代以降の第一段階は、ゲマインシャフト的な社会からの自由由来する無力感や孤独感によって、人々が自由を捨てることから始まる。自分に足りない力を権威に求め、その権威を盲信し、それに追従する。もしくは、ある文化の中でステレオタイプとなっているパーソナリティを身につけることで、画一性の中に身を置き、孤独感を紛らわす者もいる。いわば、集団規範への隷従である。こうした「集団への同調」に逃げ道を見出す人は、独裁主義国家の中であろうと、民主主義国家の中であろうと一定数存在するとフロムはいう。

近代以降の第二段階は、中世のものと同様である。自由から逃れ、権威や集団規範に隷従することが自明のように捉えられている社会に、新たな世代が生まれてくる。しかし、生まれてきた世界は、すでに自由から逃げた人々で溢れている。権威に追従する人々、集団規範への同調圧力、これらに囲まれて生きていく中で、人間本性に備わった自由を求める態度は歪んでいく。

10. 権威システムによる〈自己家畜化〉

かつてのドイツにおけるナチスの台頭は、近代以降、人類の従順化が特に深刻であった典型的な事例であろう。そのことは、ミルグラム (Stanley Milgram, 1933-84) が実施したアイヒマン実験からもわかる。

アイヒマンといえば、ナチスの高官であり、ホロコーストにも関与した人物である。アイヒマンの裁判を傍聴したアーレント (Hannah Arendt, 1906-75) は、アイヒマンがユダヤ教徒の虐殺に手を染めた理由は、アイヒマンの中に彼なりの正義や主義主張があったわけではなく、上意下達の指揮系統の中で、忠実に命令に従っただけだったと述べた。そして、凡庸な人間であるアイヒマンが惨劇を引き起こした一連の事態を、アーレントは「悪の陳腐さ (the Banality of Evil)」と評したのであった。

アイヒマンが死刑に処された翌年にあたる1963年、ミルグラムは、ホロコーストという惨劇がナチス党员であったアイヒマンであったがために起きたの

か、それとも誰であっても同様のことが起こりえたのかを明らかにするために実験を行った³⁰。

実験では、被験者を教師役と生徒役に分けておこなった。生徒役は実験者の協力者であり、実験内容についても把握している。教師役の被験者は、生徒役が間違った回答をするたびに、生徒役に電気ショックを与えることを求められる。そして、生徒役が間違えた回数が増えるほど、電圧を上げていくように指示される。ただし、生徒役には実際に電気ショックは流れていない。生徒役の被験者は電気ショックで苦しむ演技をする。教師役の被験者は、その様子を見ると次第に電気ショックを流すことにためらいを感じ始める。しかし、実験者から実験を続行するように声かけられると、教師役の被験者は目の前でどれだけ生徒役が苦しんでいても電気ショックを流したという。ミルグラムは、教師役と生徒役の距離条件を変えて実験を複数回実施している。両者の距離が離れていると、65%の人が電気ショック装置の最大値である450Vまで電圧を上げた。両者が接触する距離感でも30%の人が450Vまで電圧を上げた。

ミルグラムは、このような事態が生じた原因を人々が「権威システム」に包摂されることによって責任感を喪失したところに見ている。ミルグラムによれば、「権威システムに参加する人物は、もはや自分が独自の目的に従って行動しているとは考えず、他人の願望を実行するエージェント（代理人）として考えるようになる」という³¹。そして、こうした「エージェント状態」に陥ると、「自分を導く権威に対しては責任を感じるのに、権威が命じる行動の中身については責任を感じな」くなり、「従属的な立場の人間が感じる恥や誇りは、権威が命じた命令をどれだけきちんとこなしたかで決まるようになる」という³²。

フロムとミルグラムの視点から、近代化以降の〈自己家畜化〉の進行に関して次のようにまとめることができる。近代化以降、人々は自由に由来する孤独感や無力感から、その自由に耐えられなくなり、自由から逃げようとする。その1つの方法が、権威に擦り寄ることである。権威主義に擦り寄る人々は、権威主義の体制に取り込まれる。この体制下では、権威からの命令に従ったか否

かが道徳的な価値基準になり、命令の内容は問われない。こうした風土が醸成されるなかで、その社会集団の集団規範も権威主義に迎合するものになる。自由から逃げる際に権威に擦り寄らなかつた人々も、「機械的画一性」や「集団への同調」に逃げ込み、結果として、権威主義の体制の中に取り込まれることになる。近代化以降においては、このようにして人類の〈自己家畜化〉が進行していく。

11. 〈自己家畜化〉を下支えする学校教育

ラ・ボエシは、人間の本性を歪めるものとして、習慣の力に注目すると同時に、陶冶 (façonner) という営み、言い換えれば、教育による影響も指摘していた。教育が自由を求める人間の本性を歪めているという考えは、とどのつまり、教育が人間の自発的隷従化、〈自己家畜化〉を後押ししているという考えに行き着く。だとすれば、教育の主要機関である学校は、〈自己家畜化〉が進行する現場といえる。

そもそも、学校は教師と子どもの中に、縦の関係が築かれてしまいやすい。それゆえに、権威システム的な体制に陥りやすく、子ども達がエージェント状態になりやすい。一方で、こうした権威システムの延長線上で、学校は別の方法で人間の〈自己家畜化〉を下支えしているようにも思われる。

近代以降の学校が人間の〈自己家畜化〉を後押ししてきたことをいち早く指摘したのは、フランスの哲学者であるフーコー (Michel Foucault, 1926-84) のように思われる。例えば、東京大学教授の小玉重夫は、フーコーの言葉を引用しながら、規律訓練社会が人間の自己家畜化的な側面を支えてきたと述べる³³。

もちろん、フーコーは〈自己家畜化〉という言葉は使っていない。しかし、彼が『監獄の誕生 (Surveiller et punir : Naissance de la prison, 1975)』の中で明らかにした近代的な権力と、それに伴う社会構造のあり方は、学校が〈自己家畜化〉を成す一機関としての役割を果たしていることを暗に指摘している。フーコーの主著『監獄の誕生』の目的は、「身体に対する政治的な技術からは

じめることで、処罰方法の変遷を研究してみることで、権力とその対象の関係性に共通の歴史を読み取ること³⁴といえよう。「身体に対する政治的な技術」とは、罪を犯した人間に身体刑を課すか、あるいは、拘束し教育刑を課すか（更生させるか）という処罰のことである。異なる処罰の方法を比較してみると、近代以前と以降では権力とその対象の関係が変化したことをフーコーは明らかにする。

近代化以前、権力者側は身体刑という方法を用いることで人々を抑圧してきた。直接的に罰を受けて従順になる者もいれば、広場で行われる残虐な刑を見て従順になる者もいた。しかし、近代化以降、残忍な身体刑に代わり、教育による更生が図られることになる。その際、権力者側は身体に苦痛を与えるのではなく、監獄に入れ、監視人からの一方向的な監視という手法を使う。一方向的な監視を可能にする施設として、ベンサム（Jeremy Bentham,1784-1832）は「一望監視装置（パノプティコン）」を考案した。円形状の建物の円周部分に独房を配し、中心に監視人用の塔を置く。監視人からは、つぶさに独房の様子を見て取れる。一方で、独房からは監視人の様子はわからない。監視されているのか、監視されていないのかわからない状況の中で、独房の囚人は常に緊張を強いられることになる。もしかしたら今も見られているかもしれないと常に意識させることで、監視人の視線を囚人の中に植え付けるのである。言い換えれば、規律の内面化である。規律が内面化されることで囚人の中には順法精神が生まれる。このようにして、囚人は社会への復帰を果たすことになる。フーコーによれば、こうしたパノプティコンのシステムは、学校や工場などにも導入され、規律訓練社会を形成するに至ったという。

近代的な学校の教室の作りを見ても、パノプティコン式の構造が見てとれる。例えば、教師は教壇の上から子どもを一望する。子どもの方は、教師の方に向けて机を並べているので、自らの一挙手一投足を教師から見られているような感覚を覚える。いつ見られているかわからない状況の中で、子どもは常に真面目に授業を受けることが求められるのである。

こうしたパノプティコンのシステムによる規律の内面化は、まさに＜自己家畜化＞の1つの側面であろう。目の前に監視者がいなくとも、自分の中にある監視者が絶えず自分の行為を監視する。そうすることによって、権力を持つ側の人間は人々を自動的に従順にすることを可能にしたのである。

フーコーは、ベンサムが一望監視装置を考案する際に、ルイ14世時代の動物飼育場を参考にしたのではないかと推測している³⁵。上から見ると八角形に見えるこの飼育場は、中心に王の展望塔がある。1つの面が展望塔の出入り口になっており、残りの7つの面が動物の飼育場に面する形になっている。近代以降の規律訓練社会の原型が飼育動物の観察用施設であったかもしれないというフーコーの指摘は、人間の＜自己家畜化＞を論じる上では象徴的なもののように思われる。

以上のように、近代以降の規律訓練社会において、学校教育が人間の＜自己家畜化＞を制度的に下支えしてきたといえよう。

12. 従順という病 「学校」という名の病床

社会心理学者のグリューン（Arno Gruen, 1923-）は、人間の従順さを心の病と捉え、その病の原因を幼児期における自己疎外の経験にあると指摘する。グリューンによれば、「自分自身を疎外することが、同時に、従順を自分に強いることになる」³⁶という。自分自身を疎外するとはどのような状況であろうか。グリューンによれば、「社会化のたたかいの中で、乳幼児は、両親の意志に従うように強いられ」、「自分の欲求や楽しみを追い求めることを妨げられる」という³⁷。つまり、既存の集団へ適応させる「社会化」の過程で、子どもは自分の欲求や願望を抑えることを求められる。これが自分自身の疎外である。そして、自らの意志ではなく大人の意志に従うように仕向けられる。

ヒトを文明化し、既存社会へ適合する人間にしていく上で、子どもが自己疎外の過程を経ることは避け難い。しかし、大人の側があまりに強く自分たちの意志を子ども達に押し付けてしまうと、それは文明化の域を越えてしまう。

グリーンは、第三帝国期のドイツ公教育は、子どもの意志を屈服させることに力を注ぎ、「『権力者に対する従順さ』を人間の心の深くに根づかせ」ていたと指摘している³⁸。

近代国家において、人はその人生の初めを学校で過ごす。学校教育はその役割として、子どもを既存の社会集団に適合するように育てる一面を持っている。それゆえ、ときに、子どもの意志を打ち砕くことも必要になる。しかし、これが人間の従順化への道を切り開く諸刃の剣であることを人々が忘れれば、学校は従順さという心の病を抱えた子どもで満床になるだろう。

13. おわりに

本稿では、「人間は自己家畜化する唯一の被造物である」こと、そして、〈自己家畜化〉が教育によって制度化されていることを明らかにすることを目的に論を進めてきた。家畜化の1つの条件として、従順化というものがあった。人間以外の動物は、選択的交配によって従順さという形質を強められてきた。

一方で、人間の場合は、ラ・ボエシやフロムによれば、自発的に従順さを獲得していく。既得権益を守るため、あるいは、自らの無力感や孤独感から逃れるために、人は進んで従順になるのである。まさに、この点において、人間を〈自己家畜化〉をする唯一の被造物と呼ぶことができよう。

近代の学校は、パノプティコンと同様に、規律を内面化する仕組みを持つ。この規律の内面化によって人々は目の前に監視者がいなくとも、自分の中に植え付けられた監視者によって、その行動を絶えず監視されることになる。それによって、権力を持つ側は、人を自動的に従順にすることを可能にしたのである。それゆえ、近代以降、学校は人間の〈自己家畜化〉を制度的に下支えしてきたといえよう。

本稿では、従順さに焦点を絞って〈自己家畜化〉を考察してきた。しかし、それは〈自己家畜化〉の全体像ではなく、1つの側面でしかない。〈自己家畜化〉は、言い方を変えれば、人類は自分の在り方を自分で決められるというこ

とではないだろうか。現に、教育学者の坂元忠芳は、従来、生物学や人類学で語られてきた自己家畜化論が持つこうした側面を指摘している³⁹。さらに坂元は、自己家畜化という人間固有の営みは、人間にとって後天的な教育が有効であることを生物学的な見地から支える可能性さえあるという。

そうだとすれば、人間の〈自己家畜化〉は、決して悲観的な出来事ではない。こうした〈自己家畜化〉の正の側面に関しては、稿を変えて改めて論じたい。

¹ エマニュエル・カント『カント全集 17 論理学・教育学』湯浅正彦・井上義彦・加藤泰史（訳）岩波書店、2001年、217頁。

² 同書、218頁。

³ 同書、218頁。

⁴ Hahn, Eduard, *Die Haustiere und ihre Beziehungen zur Wirtschaft des Menschen*, Leipzig; Verlag Duncker & Humblot, 1896.

⁵ Fischer, Eugen, *Die Rassenmerkmale des Menschen als Domesticationserscheinungen*, *Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie*, 18, 1914, pp. 479-524.

⁶ 江原昭善『『家畜化』概念はホミニゼーションにどこまで適用できるか』『哺乳類科学』第27巻、第1・2号、1987年、39頁。

⁷ 小原秀雄・岩城正夫『人間をどう視るか② 自己家畜化論』群羊社、1984年、12～41頁。

⁸ 江原昭善、前掲書、39頁。

⁹ 小原秀雄・岩城正夫、前掲書、35頁。

¹⁰ Germonpré, Mietje et al, Fossil dogs and wolves from Palaeolithic sites in Belgium, the Ukraine and Russia: osteometry, ancient DNA and stable isotopes, *Journal of Archaeological Science*, 36, 2009, pp.473-490.

¹¹ Drake, Abby Grace et al. 3D Morphometric Analysis of Fossil Canid Skulls Contradicts the Suggested Domestication of Dogs during the Late Paleolithic. *Scientific Reports* vol. 5 8299. 5 Feb. 2015, doi:10.1038/srep08299

¹² Clutton-Brock, Juliet, Origins of the dog: domestication and early history, in *The Domestic Dog: Its Evolution, Behaviour and Interactions with People*, ed. James Serpell, Cambridge: Cambridge University Press, 1995, pp.7-20.

¹³ Francis, Richard C., *Domesticated: Evolution in a Man-Made World*, New York: W. W. Norton & Company, 2015.

¹⁴Belyayev, Dmitry Konstantinovich, “Destabilizing selection as a factor in domestication” , *Journal of Heredity*, 70 (5) , 1978, pp.301-308.

¹⁵Trut, Lyudmila Nikolayevna, Early Canid Domestication: The Farm-Fox Experiment , *American Scientist*, 87, 1999, p.163.

¹⁶*Loc.cit.*

¹⁷*Ibid.*, p.164.

¹⁸*Ibid.*, p.167.

¹⁹ヤーコブ・フォン・ユクスキュル、ゲオルク・クリサート『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波書店、2005年、19-20頁。

²⁰同書、11-13頁。

²¹尾本恵市編著『人類の自己家畜化と現代』人文書院、2002年、15～32頁。

²²De La Boétie, Étienne, *De la servitude volontaire, ou Le contr'un*, Bruxelles et Paris; Les marchands de nouveautés, 1836, p.66. (以下、ラ・ボエシの文章を引用したものは、拙訳である。邦訳での参照を可能にするために、邦訳書の該当箇所も併記する。ラ・ボエシ『自発的隷従論』西谷修(訳)筑摩書房、2013年、28頁。)

²³*Ibid.*, p.73. (同書、36頁。)

²⁴*Ibid.*, p.72. (同書、35頁。)

²⁵*Ibid.*, p.106. (同書、66頁。)

²⁶Fromm, Erich, *Escape from Freedom*, New York; Holt Paperbacks, 1994, p.139.

²⁷*Ibid.*, p.24.

²⁸*Ibid.*, p.108.

²⁹*Ibid.*, pp.7-18.

³⁰ミルグラム『服従の心理』山本浩生(訳)河出書房新社、2012年。本稿におけるミルグラムの実験に関する概要は同書を参考にしてている。

³¹同書、180頁。

³²同書、194～195頁。

³³小玉重夫「現代社会におけるシティズンシップ教育の課題—『動物化』、あるいは『自己家畜化』の時代を超えて—」、「ヒトの教育」編集部『ヒトの教育』、2005年、72～77頁。

³⁴Foucault, Michel, *Surveiller et punir : Naissance de la prison*, Paris; Gallimard, 1975, p.28.

³⁵*Ibid.*, pp.204-205.

³⁶アルノ・グリューン『従順という心の病：私たちはすでに従順になっている』村椿嘉信(訳)ヨベル、2016年、33頁。

³⁷同書、34頁。

³⁸同書、34～35頁。

³⁹坂元忠芳「人間の発達と『自己家畜化』論の問題点(4)」『教育』、41(7)、国土社、87～97頁。

